

令和7年度「小学校区教育協議会—はぐくみネット—」事業・学校元気アップ地域本部事業 合同実践報告会

大阪市では小学校区における「小学校区教育協議会—はぐくみネット—」事業のほか、中学校区においても学校・家庭・地域の組織的な連携のもと、地域社会全体で子どもたちを育てる「学校元気アップ地域本部事業」を実施しています。両事業の推進に向け、事業関係者及び事業に関心のある方が、事例などを通して両事業の成果と課題を共有し、教育コミュニティづくりと学校教育支援活動についてともに考え、交流する機会として合同実践報告会を開催しています。

日 程：令和8年1月23日（金）14:00～16:30

会 場：大阪市立総合生涯学習センター 第1研修室

テーマ：「地域と学校との連携」

内 容：基調講演／「ひと結び」代表 佐野 岳章

事例報告／南市岡小学校区はぐくみネット（港区）

／友渕中学校区学校元気アップ地域本部（都島区）

意見交流会

参加人数：はぐくみ関係者16名、全体28名

【基調講演】



「子どもが『やる気』になるかかわり方」と題して、「ひと結び」代表の佐野岳章さんによるワークショップを交えたご講演をいただきました。佐野岳章さんは子どもサポーターとして兵庫県川西市の小学校に勤務され、その後、「仲間づくり（学級経営）」「チームビルディング」「コミュニケーション」「子どもの権利」などをテーマに、子どもから大人まで幅広い層を対象に、コミュニケーションの方法や仲間づくりなどの手法を体験できるワークショップ（体験型研修）を開催されています。

（以下講演の要旨）

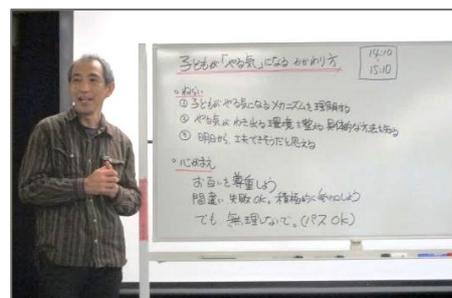
「子どもが『やる気』になるかかわり方」

○ ねらい

- ① 子どもがやる気になるメカニズムを理解する。
- ② やる気がわき出る環境を整える、具体的な方法を知る。
- ③ 明日から工夫できそうだと思う

○ 心がまえ

- ・お互いを尊重しよう。
- ・間違い、失敗はOK。積極的に参加しよう。
でも、無理しないで。（パスすることもOK）



子どもが自ら動くための「3つの心理的欲求」

- ① 関係性への欲求（仲良くしたい・大切にされたい）
- ② 有能さへの欲求（できるようになりたい・理解したい）
- ③ 自律性への欲求（自分で決めて行動したい）

モチベーションの理論（自己決定論）では、3つの基本的欲求が同時に満たされるとき、子どもは自然と意欲的になり、健やかに成長すると考えられています。

STEP1 安心できる人間関係をきずく

【関係性への欲求とは？】

周りの人と良好な人間関係を築き、受け入れられていると感じたい欲求。

「自分はここにいていいんだ」という安心感が、すべてのやる気の土台。

受容 否定せず、子どもの話や存在を受け入れる。

笑顔 口角を上げて、できれば歯を見せる、マスクをしていても笑顔なら目元が笑う。

ワークショップ

- 自己紹介（各テーブル4人を1グループとして 5グループ）
- 自分が「頑張っていること」を10個書き出してみよう（リスト作成）
 - ① A3の用紙に書き出していく
 - ② グループのメンバーに1~4の番号を割り振り、それぞれの番号の場所にリストを持って移動する。
 - ③ 移動した場所には同じ番号で違うグループの人が集合することになる。
 - ④ その場所で一列に並び、先頭の人が後ろを向く。後の人は順に先頭にいる人の「頑張っていること」リストを見て、どれか1項目をほめ、次の人と交代する。（時間制限3分くらい）
ほめる項目はかぶっても良い。何回ほめても良い。
 - ⑤ 時間が来たらほめられていた人は、その時の心境・感想をほめてくれた人たちに伝える。
 - ⑥ ほめられる人を交代して、同様にしていく。
 - ⑦ 全員がほめられる体験をしたところで、元のテーブルに戻り、どういう風にほめられ、どんな気分になっているかを伝え合う。



《ワークショップの様子》

最初の「頑張っていることを10個書く」という段階では、そんなにないわ、といった感じで10個書けない人も多数いたが、ほめ合う体験の後では、全員の表情がほぐれて笑顔になり、「こんなにほめられたことはない」「ほめられると思っていなかったことがほめられてうれしい」という感想が各グループで交わされていた。

STEP2 最適な挑戦の機会を与える

【有能さへの欲求とは？】

自分の能力を高めたり、自信を持ったりすることへの欲求。

上手になった、うまくいった、という主観的な経験が、その行動をさらにやりたいという気持ちにさせる。

最適な挑戦 「頑張れば手が届く」レベルへの挑戦

- ① できた、わかった、という成功体験を積ませる。
高すぎる＝困る・悩む 低すぎる＝退屈 ◎ちょうどいい＝成長
- ② ほめる、認める。

「できた！」を増やすアイデア

- ① 「～しなさい」（指示）を「～してみない？」にかえる。
「～できる？」（挑戦）にかえる。
- ② 人の役に立つ経験をさせる。「ありがとう」を伝える。
- ③ 「能力」ではなく「プロセス」を認める。
- ④ 根拠のないほめ言葉は効果的ではない。

STEP 3 「意味のある選択」の機会を与える

【自律性の欲求とは？】

自分の行動を自分で選択し、自分で決定したいという欲求。

自分で決めたという事実ではなく、自分で決めたという実感が重要。

子どものやる気を引き出したい状況で行動・・・選択の機会と決めるための情報を提供する。

・**選択肢を与える上での注意**

- 選択肢の数、機会が多すぎない。(迷う、決められない)
- ある選択肢を選ぶような微妙な圧力をかける。誘導するような言葉かけ。
- 魅力度の異なる選択肢を与えること。
- 選択に対して外的報酬が与えられること。
- 自由奔放（何をしても良い）とは違う。

・**面白くないことをしてもらった時の言葉かけ**

- 相手の「やりたくない」気持ちを受け止める。
- 「なぜやるのか」という理由を伝える。
- 「どちらからする？」という、子どもが自分で選べる選択肢が提示できるとよい。

以上、佐野先生には、ご自身が子どもサポーターとして子どもたちと関わる経験の中で培われたスキルを基に、コミュニケーションの手法と要点を、ワークショップを挟みながらお話しいただきました。地域活動の様々な場面で活動する時に役立つコミュニケーションの手法を体験し、留意することを知ることができました。大人でも子どもでも、互いが信頼し合える関係づくりに役立つお話でした。

お茶席（地域有志）コーナーがある。今回は市岡東中学校を通じて学生ボランティアを募集し、茶道部の生徒さんが数名来て、茶釜でのお点前を披露してもらい、担当者も喜んでいて、また本部の放送の手伝いにも中学生が来てくれてとても助かった。来年以降もこの試みは続けたいと思っている。

講堂はPTA 担当で、おもちゃなどの景品がもらえる手作りゲームでのスタンプラリーや、制服リサイクルコーナー、PTA の LINE 登録の周知などで盛り上がった。また PTA の発案で「地域の人を知ろう」と題して、地域諸団体の方々を紹介し、子どもたちといっしょにダンスを踊って交流する場を企画した。これは初めての取り組みだったが楽しくできた。

ふれあいまつりのコーナー企画は、準備から後片付けまで担当する各団体に責任をもってもらい、全体の流れに関してははぐくみネットが責任を持つという体制で、まさにコーディネートである。実施前にははぐくみネット協議会を 2 回、終了後には反省会を開催し、各団体間で話し合って改善点などを共有している。参加児童数は全校児童の約 3 分の 2 に上り、お手伝いボランティアは 100 人以上だった。参加児童へのアンケートでは「楽しかった」と答えた子どもが 100% で、準備など大変だが、子どもたちの喜ぶ顔を見るのはとても嬉しい。

3. 寺子屋みなみいちおか

「寺子屋みなみいちおか」は令和 3 年 5 月に南市岡地域の会館で始まった。当初は月曜から土曜の開催であったが、会館や指導員の確保・参加児童数などを考慮して、現在は毎週月曜と金曜の 16 時からとし、南市岡小学校に通う児童を対象に実施している。子どもたちは、学校や塾の課題、折り紙などの工作物を持参し、自宅や学校とは違う環境の中、それぞれの学習や課題に取り組んでいる。

指導員は、いきいき教室で将棋を教えていた人や退職校長など、子どもの教育に携わってきた人で、課題に行き詰まっている時には優しく答えに導いている。大阪府の「子ども輝く未来基金事業」を活用して、漢字検定用のテキストや問題集、立体パズルなどを会館内に取り揃え、子どもたちが気分転換に利用できるような工夫もしている。塾代助成等の支援で学習塾に通う児童も少なくないが、地域の会館で、地域の人が地域の宝である子どもたちに寄り添い、学習にとどまらず、困ったときに相談ができる相手として、長く貢献していける、そんな存在になるよう日々活動を続けている。

4. はぐくみ文庫

「はぐくみ文庫」は、平成 30 年に発足した。当時の図書室には学校司書の配置が無く、図書室が閉まっていることが多かった。子どもたちが本に触れる機会を増やしたいと思い、本を読みたいときに読めるよう、オープンスペースの 1 階エレベーターホールに本箱を置いてはどうかと学校に提案した。これが文庫設立のきっかけである。当時の校長先生が国語指導に力を入れていたこともあって快く協力していただき、格調高い「はぐくみ文庫開設の辞」を寄せていただいた。

この言葉は今で大切に受け継いでいる。

蔵書ははぐくみネットの予算で毎年購入する。また地域の方が自宅の児童向けの本を寄贈してくれることもある。本の選定は学校の先生方や学校司書のほか、最近では読み聞かせボランティアグループの「おはなしすまいる」の要望も聞いている。「おはなしすまいる」は週 1 回、朝の 15 分の読書タイムに低学年を中心に読み聞かせを行っているグループで、「わざわざ市立図書館に借りに行く手間が省ける」と喜んでいただいている。購入した本は私たちが日焼けや劣化予防のためのカバー掛けを行って本棚に並



べ、定期的に本棚の管理や蔵書整備をしている。今回の発表を機に全学年児童にアンケートを取ったところ、「はぐくみ文庫があることを知っていますか」という質問に「知っている」は86%、「はぐくみ文庫の本を読んだことがありますか」に対して「よく読んでいる」5%「たまに読んでいる」38%「あまり読まない」27%「全然読まない」29%だった。あまり読まない・全然読まないという傾向は、高学年、特に6年生に多かったが、はぐくみ文庫の蔵書がどちらかというと絵本に重きを置いていることに起因しているかもしれない。今後は高学年向きの本も検討したいと思う。

5. ふれあい食堂

平成29年に地域サロンで「南市岡ふれあい食堂」が始まり、いきいき教室の子どもたちが参加できるようにサロンまでの送迎を地域がしていたが、運営の都合により2年で終了した。新たに令和元年6月から南市岡会館で月に1度、第4土曜日11時～13時に開催し、カレーライスを現在は子ども0円、大人300円で提供している。女性会・連合女性部長・民生委員・ネットワーク委員会の方々がボランティアとして交代で参加してくれる。当日は、親子連れや子ども同士、地域の方も来られる。いきいき教室の子どもたちの分を指導員の先生が取りに来たり、子ども会のドッチボールやキックベースボールの練習後に子どもたちが参加したりする。毎回米を8.5升炊いているが最後まで足りるかどうかがハラハラで、会館の2階もフル稼働。子ども会の世話役さん・マイエプロン姿のお父さんやお母さんが配膳したり、カレー用の大きな寸胴鍋を洗ったり、と手伝ってくれる。「孤食」をなくすことを目的に始まったが、みんなの居場所・憩いの場になっていて、貴重な世代間交流の場でもある。

○ はぐくみネットの課題と展望・やりがい

メンバー募集で、なかなか手が上がらない。私たちもPTAを卒業して15年以上で、入手できる学校の情報には限界がある。若い人や小・中学校のPTAの方が入ってくると情報紙の内容がもっと充実できて、私たちの負担軽減にもなる。またはぐくみネットの活動が学校側の理解や協力の度合によって、左右されることもある。今は小学校も中学校も協力していただいているが、異動があれば同じようにできるかはわからない。

そうした課題や不安もあるが、PTAの規模も大きくなっているのだから、できればもっと現PTAさんを巻き込んでいきたい。例えば、かわらばんにPTA発信枠を設ける、ふれあいまつりをPTA主催に戻し、はぐくみネットはバックアップに回るなど。

本校区のように、中学校や元気アップと連携しながらすすめているはぐくみネットは少ないと聞いている。いろいろな方々とつながる、このスタイルはとても貴重で素敵な伝統だと思う。転勤された先生の中には今でも情報誌でつながっている方がいる。PTAの実行委員会の前には必ず、はぐくみネットから伝えることはないですかと現役員さんからメールが入る。私達から地域諸団体をお願いすることが多々あるが、すんなりと受けてくださるのも人間関係をきっちり作ってこそである。「持ちつ持たれつ」が私のモットー。あくまでも私達は黒子で、しかもボランティア。取り組んでいてしんどいこともあるが、地域で子どもを育むことにやりがいがある。

○ はぐくみのうた

ふれあいまつりで流しているはぐくみの歌「大好き！南市岡」は、発足当時のメンバーで作詞作曲した。この歌を受け継いでいってもらいたいと心から願っている。

はぐくみのうた 「大好き！南市岡」

- ※ えがおあふれる みなみいちおか
ちよつとはしれば こうくがい
このまちいちばん だいすきや
こころひとつに はぐくもう
- 1 としょかんかいほう はぐくみぶんこ
あさのひととき よみきかせ
みんなでたのしむ なつまつり
ふれあいまつりで ちいきのわ
- ※ くりかえし

- 2 おっちゃん おばちゃん ありがとう
あんしんあんぜん みまもりたい
みんなをつなぐよ かわらばん
はぐくみネットで ちいきのわ

いつまでも つないでいこう
はぐくみネットで ちいきのわ

(令和4年に歌詞を一部変更)

以上、地域の中で子どもも大人も顔の見える関係のもと、多彩な取り組みを楽しみながら実践し、学校と地域を結ぶ活動をされている様子がわかる報告でした。

【事例報告】 学校元気アップ地域本部事業

都島区の友渕中学校区学校元気アップ地域本部事業から「元気アップから発信する取組み～学校・地域を巻き込んで～」というテーマで、学校図書館を拠点に生徒の読書活動の活性化を促す活動の状況を報告されました。

友渕中学校は都島区の中でも校区地域にマンションなどの集合住宅が多くあって、住戸数が非常に多い。学校は各学年6～7クラス、全20クラスで、生徒数は約750名。同じ校区内の小学校は1校のみ（友渕小学校、児童数は約1,419名）で、小学校1校から中学校1校へ進学する体制のため、地域や保護者同士のつながりが継続しやすい特徴がある。元気アップの活動としては、図書館活動・学習支援活動・進路学習支援・地域行事への協力などで、元気アップから学校・地域へ発信し、実現できているのは、青空図書・絵の本ひろば・元気アップ自習室・2年生進路ガイダンス講話で、本日は、その中の「絵の本ひろば」を中心にご紹介したい。

「絵の本ひろば」

中学生に“絵本”は合わないと思われがちだが、ここではいわゆる絵本だけではなく、写真や絵を中心に読み進められる本も含めて取り組んでいる。文字量が少ない本も多い。本が苦手な生徒、発達障害のある生徒、外国にルーツのある生徒もいる。これは読めるだろうという、見込みのラインにいない子たちもいる。だから誰もが入りやすい入口を作ること目的とした選書で、「絵の本」という表現の理由である。

“ひろば”は図書室を会場にしていて、約400冊の本を面展台（本の表紙を見せる展示台）で並べ、部屋全体を本の表紙で囲むようにして“ひろば”の空間を作る。友渕中学校では国語の授業に取り入れており、全クラスが国語の授業時間に図書室に来て、1時間をこの“ひろば”で過ごす。活動の冒頭では読み聞かせ

は行わない。最初に、どのような本があるのか、初めて見る生徒でも手に取りやすいように、いくつかの本を例に「楽しみ方」を紹介する。その後は自由読書の時間として、生徒が自分で選び、自由な姿勢で読めるようにしている。そうすると（何人も生徒が頭を突き合わせて床に置かれた1冊の本を見て楽しんでいる画像を提示しながら）1冊の本の周りを囲って団子のようになって、わいわい言いながら楽しんで読んでくれたりする。（次々と“ひろば”での本を楽しむ様子の画像を紹介）「この本が面白いよ」と生徒が先生に勧めて、いつもとちょっと違う会話が生まれる。料理本の写真を見て「おいしそう」「どれが食べたい？」と話すだけでも読書である。（男子数人で組体操のピラミッドを作っている写真を示して）これは組体操をしているのではなくて、『けんちく体操』という世界の建築物を肉体で表現することを紹介した本のページを見ながら、生徒たちがエッフェル塔に実際に挑戦してみた、という場面である。

図書室には色々な本があるが手に取ってみたいとわからない。大人も純文学ばかり読んでいるわけではなく様々な本を楽しんでいる。図書室にも様々な本があることを知ってほしい、ということで写真集なども含め、多様な楽しみ方ができる本を選んで並べている。寝転がって読む、ページを広げて体感する、点字本を指先でたどるなど、さまざまな読み方が“許される”空間づくりで、「こう読まなければならない」と押しつけず、「読めている」「取り組んでいる」ことを認め合える場にすることで、生徒が安心して本に近づけている。外国にルーツのある生徒も増えてきているが、その子どもたちもこの“ひろば”なら一緒に楽しめ、同時に笑える。

この取組の実施期間は2週間で、授業での利用に加えて、授業時間外にもひろば（図書室）を開放し、支援学級の生徒や、教室に入りにくい生徒にも「いつでも来ていいよ」「ゆっくり休めるよ」と声をかけている。2～3時間続けて過ごす生徒もおり、本を読むだけでなく、おしゃべりをしながらゆったりと時間を過ごせる居場所にもなっている。また大人だけで運営するのではなく、図書委員の生徒と一緒に作る。図書室を“ひろば”に変えるための設営、廊下の装飾、ポスター作成、校内放送や口コミによる広報なども図書委員が担っている。さらに面展台や本の撤収・返却作業まで、図書委員の生徒が役割を持って関わることで、図書室の変化を自分事として楽しめるようになっている。



学校と地域をつなぐ元気アップの役割

「絵の本ひろば」は校内だけで完結せず、期間内の休日に1日、地域にも開放している。『友渕中学校で絵の本ひろば 地域開放 Day』と銘打った行事で、その日の運営の協力をしてくれる生徒ボランティアを募集し、準備・受付・案内・見守り・撤収までを一緒にする。来場者が迷わない導線づくりや経路案内代わりの本の表紙展示などの方法も、生徒と相談して決めている。

昨年度は1日で約180名の地域の方にお越しいただいた。家族連れや地域の方々が来訪され、中学生ボランティアが地域の子供と一緒に本を読み遊んで、初対面同士でも自然に交流が生まれる機会になっている。たまたま参加された更生保護女性会の方に、中学生が地域の子供たちと一緒に本を介して話したり遊んだりしている様子を見てもらえた。わざわざ「見に来てください」ではなくて、自然にそうした場面を見てもらえるというのが地域開放 Day の良いところだ。

ボランティアの中学生が小さい子への関わり方で「どう読んであげたらいいのか？」と質問され、「別に読まなくてもいいよ、そばに行ってその子が読んでいるのを聞いてあげるだけでもうれしいと思うよ」

と伝え、読んでいる子の横に座りに行った。この地域開放に3年間ボランティアで参加してくれた女子生徒と、卒業後にたまたま出会って「今度またするよ」と伝えたら「行きたいです」と言ってくれた。この取組で、人と人がいろいろな形につながっている。

「絵の本ひろば」は生徒のためにと始めたが、生徒や先生に入ってきてもらい、地域に発信していくことで、様々な場面に様々な人が入ってくる。それによって、私1人がやっているだけでは絶対に見られない場面がとて多く生まれる。それを大人たちの目、また子どもたち各々の目で見ていることが、元気アップの「地域と学校をつなぐ」活動として得難いことだと思っている。

元気アップから発信している活動はこのほかにも色々あるが、それも含めて、生徒のためだけにとという視点ではなく、それをどういう人たちにつなげていくか、どういうふうに関わり展開していくかを考えている。地域と学校とがまざり合った良い環境で、様々な取り組みができるのではないかなと思っている。「絵の本ひろば」も、最初は本当に“ひろば”をするだけだった。そのうち生徒が手伝ってくれるようになり、国語の授業に入れていただけるようになり、地域にも開放し、中学生ボランティアも入ってきた。その変遷は様々な支援によるもので、仲間が増え協力してくれる人が増えてきた。こうした様々な活動をする中で、いろんな体験ができていると思っている。

以上、「絵の本ひろば」の取組について、活動時の画像を多く紹介しながらお話しいただきました。活動に込めた思いの熱さ・深さを、いきいきとした語り口から感じられる報告でした。

【意見交流会】

机毎のグループで、意見や感想・自校区の例などを話し合った後、全体での質疑応答を行った。

Q：南市岡のはぐくみネット情報誌を見ての質問で、地域活動協議会（以下 地活協と略す）が NPO 法人という形をとられているから、はぐくみネットと学校元気アップ・生涯学習ルームをまとめて掲載することができるのか？

A：はぐくみ通信は地活協の補助金で作成している。はぐくみコーディネーターの私が地活協の一員で、はぐくみネットも最初から地活協に入っているため、地域活動の紹介と併せて両面になっている。NPO だからというわけではない。

Q：元気アップも地活協に希望があれば入ることができるのか？

A：地活協は小学校区単位なので、はぐくみネットが基本。元気アップの記事があるのは、編集者個人と学校元気アップの担当者や中学校の管理職とのつながりがあるため、原稿をいただいているから。

Q：ふれあい食堂であるが、地活協で高齢者向けにふれあい食堂をしているのが一般的かと思っているが、それとはまったく別で活動されているのか？

A：当初は南市岡こども食堂実行委員会という組織で実施され、地域の子どもとお年寄りの交流目的でされていた。

Q：友渕中学校の「絵の本ひろば」の活動を聞いてびっくりした。400冊もの本を集めてくるのも大変だし、体力もいる。ここまでどのくらい時間がかかり、協力者などについて知りたい。

A：今年度で7回目になる。1番最初は私の子どもが中学校に在籍している時で、PTAの人権活動で図書委員会と一緒に取組んだ。子どもが卒業して、私が元気アップのコーディネーターになり、元気ア

アップと図書委員会と図書ボランティアで昼休みと放課後に図書室を開けていた。コロナ禍の時期を超えて、元気アップも校内での活動ができるようになってきて、先生から“ひろば”を今年はやりましようと言われたが、コロナもすっかり終息したわけではなく感染経路などが課題だったので、昼や放課後はやめて授業としてやれば、参加者も特定されて心配な要素が減るのではないか、小学校の「図書の時間」のような形で考えては、と提案し、検討してもらった結果、実施になった。準備期間は2週間ほどしかなかったが、1小1中の強みで地域のつながりがあり、協力してもらえる人たちがいた。その流れの中で今がある。

【参加された方々の感想】 アンケートより抜粋

◎基調講演について

- ・褒めていただくという体験はとても新鮮だった。褒めることの重要性に新たに気づかされた。
- ・「意味のある選択」の機会を与えることの必要性について学べた。
- ・佐野先生の講義で、周りの方との情報交換がしやすかった。
- ・佐野先生の話はとても興味ある内容で、取り入れてみたいと思った。
- ・褒められて喜ぶのは子どもだけではない。大人もこれだけ褒められると嬉しい。
- ・ワークショップが良かった。笑顔になる講座を受けた後なので、それぞれの学校の取組みを、いつも以上に笑顔で共感できたように思う。

◎ はぐくみネット事例報告について

- ・地域活動協議会をNPO法人にして活動することができるかとメリットがあるのか、調べてみたい。
- ・はぐくみネットであそこまで、できないなあと思った。
- ・うちのはぐくみでは難しいことをやっているなど思った。

◎ 学校元気アップ 事例報告について

- ・「絵の本ひろば」の活動に目からうろこ。絵本の使い方。活動が素晴らしい。
- ・絵の本は中学生にも楽しめるということで、小学生にも取り入れたい。
- ・興味がわいた。参考になった。楽しく聞かせていただいた。

◎ 報告会全体について

- ・ワークショップにも参加でき、いろいろな取組みを聞くことができた。
- ・楽しく参加できた。
- ・地域と学校の連携の形について具体的に知ることができた。
- ・独自の取組が地域と繋がっていて、その中で子どもたちが活動する様子が見えてすごいと思った。
- ・発表の内容、2校区がすごくガンバっているので、ご苦労様と言いたい。
- ・両校区の活動は大変意欲的で、素晴らしい。すごかった。学びがあった。ためになった。
- ・日常知り得ない事例を紹介いただき、大変面白かった。大変興味深い内容だった。
- ・ボランティアとして参加したいと思うほどだった。活用したい。